

出生順位と介護経験

佐藤友光子
(四国学院大学)

Birth-order and Care Experience

Yumiko Sato

本稿では、本人の親への介護経験と出生順位との関連を介護へのかかわりの程度と内容の両側面から男女別に確認し、コーホートによる様態の違いを検討する。主な知見を以下に挙げる。①長男や一人っ子の方が次三男より、本人の親への介護・看病へのかかわりの程度が強く、実際の介護の経験者割合が高い。②介護・看病の費用負担については、長男の経験者割合が顕著に高い。③実際の介護・費用負担の両方を経験した者の割合は、長男、一人っ子が次三男に比べて高い。④男性では、若いコーホートで出生順位差が縮小している。⑤女性では、介護経験と出生順位との間に男性におけるほど顕著な傾向を見いだせない。⑥女性の一人っ子では介護・看病経験なしの者の割合も高いが、介護・看病へのかかわりの程度が強い者の割合も高く、実際の介護・費用負担についても経験者割合が高い。⑦女性では、長女・次三女を問わず、男きょうだいのない者で介護・看病へのかかわりの程度が強く、実際の介護・費用負担とも経験者割合が高い。

キーワード：介護経験 出生順位 性差とコーホート差

1. 本稿の分析課題と仮説

本稿の目的は、親に対する介護の経験と定位家族上の位置としての出生順位との関係を明らかにすることにある。

親に介護が必要となった場合、個人の介護経験の量と質は、規範（ジェンダーや出生順位によって異なる、「誰がどのように介護すべきか」の文化的期待）、資源（金、時間、エネルギー、人的ネットワークなど）、状況（親との空間的距離、心理的距離など）の組み合わせによって規定されると考えられる。男性の場合、日常生活の手助けなど親への実際の介護行為はその配偶者に主として任される可能性が高いが、介護・看病の費用負担を含めた広い意味での「介護経験」についていえば、本調査対象者のうちで親に介護が必要となった者の7割以上がなんらかの形で介護経験をもっている。しかし、介護経験の量と質

は経験的にも知られているように、介護に対する文化的期待とそこから生じる諸条件（親との同別居等）の差異を背景として長男・次三男間で異なっている。

女性に関しては、結婚して夫方に嫁いだ場合、長女であろうと次三女であろうと男性ほど本人の親へに対する介護期待は強くないかもしれない。ただし、男きょうだいがいない場合、介護期待は女性にも課せられる。実際、本調査では親に介護が必要となった対象者中でなんらかの「介護経験」がある者は男性と同様の7割以上にのぼっている（ちなみに、配偶者の親の介護経験については男性で5割弱、女性で9割弱と性差が存在する）。その際、出生順位による差異は存在するだろうか。女性の場合、本人の親の介護経験の量と質は男きょうだいの有無に依存すると思われる。

本稿では介護経験を規定すると思われる諸条件のうち出生順位を取り上げ、量（程度）質（内容）との両側面から男女別に関連を確認し、また、コーホートによるその様態の違いを検討する。

ところで、配偶者の親の介護経験については、とりわけ配偶者の状況に大きく依存すると考えられるが、配偶者については出生順位をはじめとして重要な情報が得られていない。そこで、ここでは主として本人の親（以下では、とくに指定がない限り単に「父親」「母親」「父母」と表記した場合本人のそれを指すものとする）についてのみ扱うことにする。

分析に先立つ仮説は以下のようなものである。

仮説1：男性では、本人の親への介護経験の程度は、長男の方が次三男よりも大きい。

仮説2：男性では、本人の親への介護経験者の割合は、実際の介護行為・費用負担の両面において長男の方が次三男よりも高い。

仮説3：女性では、本人の親への介護経験の程度は、男きょうだいのいない長女で大きい。

仮説4：女性では、本人の親への介護経験者の割合は、実際の介護行為・費用負担の両面において男きょうだいのいない長女で高い。

仮説5：男女とも若年のコーホートでは年長コーホートに比べて出生順位による介護経験の差異が縮小している。

以下では上記の仮説を検討するための変数の設定と分析対象について述べる。

2. 分析対象と変数の設定

(1)分析対象

本稿では、介護経験についてのデータが得られている1921年から1940年までに出生した男女（調査時点で78歳から59歳）のサンプルを用いる。

さらに、分析対象となるサンプルにおいては、男女別の出生順位（長男長女か、それ以

外か) が特定できなくてはならない。きょうだいについては次のようなデータが得られている。①死亡した者を含む対象者本人のきょうだい数 ②本人の健在きょうだい数 ③本人の健在きょうだいのうち最年長の者から3人までについての性別、出生年等。これらの情報から同定できる範囲で対象者の出生順位を割り出した(なお、配偶者のきょうだいについてはデータが存在しない)。入手したデータからは、介護が必要となった時期における健在きょうだい数はわからない。そこで比較的高齢の対象者を含んでいることを考えあわせて、死亡きょうだいがいるケースは分析から除外した。また、たとえば生存きょうだい5人以上であって本人がデータのある3人のきょうだいよりも若い場合、本人の出生順位は同定できない。こうしたケースも分析から除外されることとなった。さらに、このうち結婚経験のない男性4サンプル、女性11サンプルについては、条件をある程度コントロールする意味で対象から除外した。もとより、こうして引き出されたサブサンプルにバイアスがかかっている可能性は否定できない。たとえばいうまでもなく、年長コーホートほど除外ケースが多くなっている。

分析対象者は、表1に示すごとく男性451名(1921-30年出生319名、1931-40年出生610名)、女性478名(177名、301名)の計929名である。

表1 分析対象のサンプル構成 (人)

	1921-30 年出生	1931-40 年出生	計
全体	319(1101)	610(1353)	929(2454)
男性	142(512)	309(656)	451(1168)
女性	177(589)	301(697)	478(1286)

注:()内はサンプル全体の人数。

(2)説明変数について

出生順位のカテゴリーとしては、「長男/長女」「次三男/次三女」(長男/長女以外であって一人っ子でない者)「一人っ子」の3カテゴリーを用いた。

また、女性については、男きょうだいの有無が介護経験に関係してくると思われるので、さらに、「長女・男きょうだいあり」(「長女・あり」と表記。以下同様)「長女・男きょうだいなし」「次三女・男きょうだいあり」「次三女・男きょうだいなし」「一人っ子」の5カテゴリーをもつ説明変数を設定した。

(3)被説明変数について

介護経験については、調査票の質問から量・質の両側面に関する以下のような変数を作成した。

①介護・看病経験の有無(2カテゴリー)

「介護・看病にかかわった」(経験あり):調査票の質問の「中心となって看病・看護

にあたった」「中心ではないがかなりかかわった」「少しだけかかわった」に対応
「かかわっていない」（経験なし）：調査票の質問の「特にかかわっていない」という
カテゴリーに対応（「突然の死で、ほとんどする機会がなかった」者は、介護を
必要とした時期がなかった者として分析から除外している）

なお、ここでの「介護・看病にかかわった」は、見舞い・費用負担含むカテゴリーで
あることに留意されたい。

②介護・看病経験の程度（3カテゴリー）

「中心となって看病・看護にあたった」

「中心ではないがかわった」：調査票の質問の「中心ではないがかなりかかわった」
「少しだけかかわった」に対応

「かかわっていない」：調査票の質問の「特にかかわっていない」に対応

③実際の介護経験の有無（2カテゴリー）

「経験あり」：「食事の手助け」「着替えの手助け」「入浴の手助け」「排泄の手助け」
「歩行の手助け」「その他身の回りの世話」のうちのいずれかの経験のある者

「経験なし」：上記のいずれの経験もない者

④介護・看病の費用負担経験の有無（2カテゴリー）

「経験あり」：「介護・看病の費用負担」の経験のある者

「経験なし」：「介護・看病の費用負担」の経験のない者

⑤介護・看病経験の内容（4カテゴリー）

「実際の介護・費用負担の両方」「実際の介護のみ」「費用負担のみ」「話し相手・見舞
いのみ」

⑥本人・配偶者の親への介護経験（4カテゴリー）

介護経験の量についてさらに確認するために、本人と配偶者の親の介護経験の有無に
ついての合成変数を設定した。カテゴリーは「本人・配偶者双方の親の介護経験あり」
「本人の親のみ」「配偶者の親のみ」「かかわっていない」の4つである。

なお、①②⑥は介護の量的側面、③④⑤は質的側面に対応する。

3. 結果

以下、介護経験の諸変数と出生順位との関係について男女別、父母別にみた結果を示す。
なお、分析においては、それぞれの親について介護を必要とした時期があった者を母数と
している。付問のなかで「突然の死でほとんど（介護・看病を）する機会がなかった」と
回答した者については、必要とした時期がなかったものとして母数から除外している。

(1) 男性の介護・看病経験と出生順位

(a) 介護・看病経験の有無

父親が亡くなるまでの間に介護・看病を必要とした時期があったとする者は202名であつて、これは本稿サンプル中の44.8%、父親が死亡している者のうちの53.9%を占める。表2より、父親に対する介護・看病経験（見舞いや費用の負担を含む）の有無と出生順位との関係みると、経験ありとする者は一人っ子で9割強、長男で8割台と、次三男の7割に比べて割合が高くなっている(0.1>p>0.05)。対象者を1920年代出生（1921-30年出生）コーホートと1930年代出生（1931-40年出生）コーホートにわけて比較したが、長男と次三男の間でコーホートによる傾向の違は認められなかった（一人っ子については母数が少ないため、傾向を指摘できない）。

母親が亡くなるまでの間に介護・看病を必要とした時期があったとする者は179名であつて、サンプル中の39.7%。母親が死亡している者のうちの59.3%を占める。母親についても、父親と同様、介護・看病経験がある者は長男・一人っ子で8割台と次三男の7割台に比べて割合が高い。ただし、30年代出生コーホートでは長男が次三男より20ポイント近く経験ありの割合が上回っているのに対し、20年代出生コーホートでは差が小さくむしろ次三男の方が長男よりも6ポイントほど高い数値を示している。

さらに、父母をあわせた「本人の親」の介護・看病経験についてみると、長男・一人っ子で9割弱と、次三男の7割台に比べて経験ありとする者（父母のどちらかないし双方の介護・看病を経験した者）の割合が高い(p<0.05)。長男・次三男間の差異をコーホート間で比較すると、20年代出生コーホートでは8ポイント程度であるのに対し、30年代出生コーホートでは15ポイントと差が大きい。

(b) 介護・看病経験の程度

つぎに、介護・看病経験の程度を「中心となって介護・看病にあたった」「中心ではないがかかわった」「介護・看病にかかわらなかった」の3段階に分けてみる（表2）。父親について「中心となって介護・看病にあたった」とする者は、長男・一人っ子で2割台と、次三男の1割に比べて割合が高い。逆に、かかわらなかったとする者は次三男3割弱と、長男・一人っ子の1割前後と比べて割合が高い。長男・次三男間の差異をコーホート別にみると、中心となってあたったとする者の割合の差は、20年代出生コーホートで20ポイント弱、30年代出生で10ポイント弱と若いコーホートにおいて差異が小さくなっている。

母親についても、「中心となって介護・看病にあたった」とする者の割合は長男・一人っ子で3割弱と次三男の2割弱に比べて割合が高い。逆に、かかわらなかったとする者は次三男で2割台と長男・一人っ子の1割台と比べて割合が高い。コーホート別にみると、「中心となってあたった」とする者の長男・次三男間の差異は20年代出生コーホートでは30ポイント近くあるが、30年代出生では5ポイント程度である。30年代出生の次三男では、20年代出生よりも回答のばらつきが大きい。

(c)介護・看病経験の内容

表3から実際の介護行為の有無についてみると、父親については、「経験あり」の者が一人っ子・長男で7割前後なのに対し、次三男では5割半ばにとどまっている。長男・次三男間をコーホート別にみると、20年代出生コーホートでは「経験あり」の割合が30ポイ

表2 長男/次三男別にみた本人父母への介護・看病経験の有無 (%)

		介護・看病にかかわった		かかわらなかった	総数		
		中心となって介護・看護にあたった	中心ではないがかかわった				
本人の父							
全体	長男	85.6△	21.2	64.4	14.4	106	
	次三男	72.4	10.3	62.1	27.6	72	
	一人っ子	91.7	25.0	66.7	8.3	23	
20年代出生	長男	85.7	24.5	61.2	14.3	49	
	次三男	71.4	7.1	64.3	28.6	14	
	一人っ子	80.0	40.0	40.0	20.0	5	
30年代出生	長男	85.5△	19.3	66.3	14.5	83	
	次三男	72.7	11.4	61.4	27.3	44	
	一人っ子	100.0	14.3	85.7	-	7	
本人の母							
全体	長男	87.5	27.9	59.6	12.5	104	
	次三男	75.0	16.1	58.9	25.0	56	
	一人っ子	83.3	27.8	55.6	16.7	18	
20年代出生	長男	86.7	33.3	53.3	13.3	45	
	次三男	92.9	7.1	85.7	7.1	14	
	一人っ子	75.0	25.0	50.0	25.0	8	
30年代出生	長男	88.1	23.7	64.4	11.9	59*	
	次三男	69.0	19.0	50.0	31.0	42	
	一人っ子	90.0	30.0	60.0	10.0	10	
本人の父/母							
全体	長男	88.4*	/	11.6	164		
	次三男	75.3				24.7	81
	一人っ子	89.5					
20年代出生	長男	87.5		12.5	64		
	次三男	80.0				20.0	20
	一人っ子	75.0					
30年代出生	長男	89.0*		11.0	100		
	次三男	73.8				26.2	61
	一人っ子	100.0					

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

数値列左端の記号は「介護・看護にかかわった」「かかわらなかった」間の χ^2 検定の結果。

ント台で30年代出生の10ポイント弱に比べて差が大きい。母親については、「経験あり」が一人っ子で7割強と割合が高いが、長男・次三男ではともに6割台で差異は認められない。コーホート別にみると、20年代出生コーホートでは長男・次三男の差異が20ポイント近くあるが、30年代出生では差異がごく小さい。

介護・看病の費用負担の有無についてみると、父親については、「経験あり」の者が長男で6割強ともっとも割合が高く、以下一人っ子で4割台、次三男で3割強とカテゴリー間の差異が大きい ($p<0.001$)。コーホート別にみると、長男・次三男間の差異は30年代出生コーホートで30ポイント程度と、20年代出生コーホートの40ポイント以上に比べて差異が小さい。母親については、長男で6割強ともっとも割合が高く、次三男で4割、一人っ子で2割台とやはり差異が大きい ($p<0.001$)。長男・次三男間でのコーホート間差異は認められない。

介護・看病内容を表4より、いま少し詳しくみる。父親について、実際の介護・費用負担の両方を経験した者は一人っ子で4割台、長男で3割強なのに対し、次三男では1割台にとどまっている。一方、「実際の介護のみ」「話し相手・見舞いのみ」の者は次三男でと

表3 長男／次三男別にみた本人父母への実際の介護・費用負担経験 (%)

		実際の介護経験あり	費用負担経験あり	総数
本人の父				
全体	長男	67.3	62.8***	113
	次三男	54.8	28.6	42
	一人っ子	72.7	45.5	11
20年代出生	長男	66.7	64.3*	42
	次三男	40.0	20.0	10
	一人っ子	75.0	25.5	4
30年代出生	長男	67.6	62.0*	71
	次三男	59.4	31.3	32
	一人っ子	71.4	57.1	7
本人の母				
全体	長男	64.8	63.7***	91
	次三男	61.9	40.5	42
	一人っ子	73.3	26.7	15
20年代出生	長男	64.1	61.5△	39
	次三男	46.2	38.5	13
	一人っ子	83.3	16.7	6
30年代出生	長男	65.4	65.4*	52
	次三男	69.0	41.4	29
	一人っ子	66.7	33.3	9

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

数値列の記号は「経験あり」「なし」間の χ^2 検定結果。

もに3割台と他カテゴリーの1～2割台に比べて割合が高い。また、「費用負担のみ」は次三男で1割、一人っ子でゼロなのに対し、長男で2割台と割合が高くなっている(p<0.01)。コーホート別にみると、実際の介護・費用負担両方の経験者割合の長男・次三男間の差異は、20年代出生コーホートで40ポイント台なのに対し、30年代出生では20ポイント弱である。全体的に30年代出生の方で次三男の回答のばらつきが大きく、長男との差異が小さくなっている。

母親については、実際の介護・費用負担両方の経験者は長男で4割ともっとも割合が高く、次三男の2割台、一人っ子の1割台と続く。「実際の介護のみ」は、一人っ子で6割と、次男で3割台と、長男で2割台である。「話し相手・見舞いのみ」は次男で2割台と、長男・一人っ子の1割強に比べて割合が高い。一方「費用負担のみ」は長男で2割強と、次三男・一人っ子の1割強に比べて割合が高い(p<0.05)。コーホート別にみると、「両方」とする者の割合の長男・次三男間差異は30年代出生コーホートで10ポイント強と、20年代出生の20。

表4 長男/次三男別にみた本人父への介護内容 (%)

		実際の介護・費用負担両方	実際の介護のみ	費用負担のみ	話し相手・見舞いのみ	総数
本人の父						
全体	長男	32.7	25.7	21.2	11.5	113**
	次三男	16.7	38.1	9.5	35.7	42
	一人っ子	45.3	27.3	-	27.2	11
20年代出生	長男	45.2	21.4	19.0	14.3	42△
	次三男	-	40.0	10.0	50.0	10
	一人っ子	25.0	50.0	-	25.0	4
30年代出生	長男	39.4	28.2	22.5	9.9	71*
	次三男	21.9	37.5	9.4	31.3	32
	一人っ子	57.1	14.3	-	28.6	7
本人の母						
全体	長男	40.7	24.2	23.1	12.0	91*
	次三男	26.2	35.7	11.9	26.2	42
	一人っ子	13.3	60.1	12.3	12.3	15
20年代出生	長男	38.5	25.6	23.1	12.8	39*
	次三男	15.4	30.8	15.4	38.5	13
	一人っ子	-	83.3	16.7	-	6
30年代出生	長男	42.3	23.1	23.1	11.5	52
	次三男	31.0	37.9	10.3	20.7	29
	一人っ子	22.2	44.4	11.1	22.2	9

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

ポイント強に比べて小さい。また「話し相手・見舞いのみ」の者の割合の差異は、30年代出生で10ポイント弱と、20年代出生の20ポイント半ばに比べて小さい

(d)本人および配偶者への親の介護・看病経験

さて、本人と配偶者の親を合わせたトータルでの介護・看病経験は出生順位によって異なっているだろうか。「本人・配偶者の親双方」の介護・看病を経験した者の割合は高い方から次三男、一人っ子、長男となっているがその差はわずかである(表5)。「本人の親のみ」とする者は長男で4割強と一人っ子・次三男の3割強に比べてやや割合が高い。

長男・次三男間をコーホート別に比較すると、「双方」については20年代出生で差異が10ポイント以上となっているが、30年代出生では数ポイントにすぎない。「本人の親のみ」の者は、20年代出生コーホートの長男で5割強ととりわけ割合が高い(一人っ子、次三男とともに2割強)。かかわらなかったとする者は20年代出生の一人っ子に4割強と割合が高い(長男、次三男ともに2割強)。30年代出生ではこうした差異が縮小している。

ちなみに、配偶者の親について介護・看病経験がある者は次三男で49%とともとも割合が高く、長男では38%、一人っ子では37%となっている。20年代出生コーホートでは経験ありの者が次三男で64%と、長男の31%に比べて顕著に割合が高いのに対し、30年代出生では長男・次三男の差異がほとんどない(42%と44%)。このように、配偶者の親の介護経験者については次三男の割合が高く、程度の問題はともあれ、そのことが次三男において本人・配偶者の親双方に関わったとする者の割合を相対的に高くしている。

表5 長男/次三男別にみた本人/配偶者父母への介護経験 (%)

		本人・配偶者の親双方	本人の親のみ	配偶者の親のみ	かかわらなかった	総数
全体	長男	21.2	44.1	9.5	25.2	222
	次三男	27.4	32.4	11.8	28.4	102
	一人っ子	23.4	33.3	10.0	33.3	30
20年代出生	長男	20.8	51.9	3.9	23.4	77*
	次三男	37.0	22.2	14.8	25.9	27
	一人っ子	21.4	21.4	14.3	42.9	14
30年代出生	長男	21.4	40.0	12.4	26.2	145
	次三男	24.0	36.0	10.7	29.3	75
	一人っ子	25.0	43.8	6.3	25.0	16

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

以上みてきたように、男性の介護経験においては量・質ともに長男が次三男を凌駕していることがわかった。一人っ子はほぼ長男と同じ傾向を示している。とくに、看病・介護の費用負担の側面について長男傾向が顕著である。また、若いコーホートではおおむね介護経験の出生順位差が縮小している。

(2)女性の介護経験と出生順位

(a)介護・看病経験の有無

父親が亡くなるまでの間に介護・看病を必要とした時期があったとする者は201名で、本稿サンプル中の42.1%、父親が死亡している者のうちの50.3%を占める。表6より、父親に対する介護・看病経験の有無を出生順位別にみたところ、経験ありとする者の割合は長女・次三女とも8割強で差はわずかであった。一方、一人っ子では7割強と割合が低くなっている。長男・次三男間の差異のコーホートによる違いは認められない。

母親が亡くなるまでの間に介護・看病を必要とした時期があったとする者は205名で、本稿サンプル中の42.9%、父親が死亡している者のうちの63.5%を占める。母親については、出生順位の3カテゴリー間で差異は認められない。コーホート別にみても、カテゴリー間の差異はわずかである。

さらに、父母をあわせた介護・看病経験についてみたが、これも全体として差異は認められず、長女・次三女間のコーホート間差異も小さい。

(b)介護・看病経験の程度

介護・看病経験の程度をみると、父親については「中心となって介護・看病にあたった」とする者は一人っ子で5割弱と割合が高いが、長女・次三女ではともに1割台と差異は小さい(表6)。一人っ子ではかかわらなかった者の割合が2割台と、長女・次三女1割台に比較して高く、回答のばらつきが大きい($p<0.001$)。20年代出生コーホートでは、中心となったとする者の割合が長女より次三女で10ポイント以上高いが、30年代出生ではほとんど差異がない。ちなみに20年代出生では一人っ子に中心となったとする者の割合が5割台と非常に高い。

母親については、「中心となって介護にあたった」とする者の割合が一人っ子で7割強と非常に高く、長女では3割弱、次三女では1割強となっている。一方、かかわらなかったとする者のカテゴリー差はほとんどない($p<0.001$)。コーホート別にみると、中心となったとする者の長男・次三男間の差異は20年代出生では10ポイント弱であるが、30年代出生では20ポイント弱と差が大きい。

(c)介護・看護経験の内容

表7より、実際の介護経験の有無についてみると、父親については経験ありとする者の割合が一人っ子で9割強と高く、長女、次三女では8割前後である。コーホート別に長女・次三女間の差異をみてみたが、目立った傾向は認められない。

母親については、経験ありの者の割合が一人っ子で100%を占めている。長女・次三女では8割台で両者の差異はわずかである($0.1>p>0.05$)。コーホート別にみると、20年代出生コーホートでは長女・次三女間の差異がごくわずかであるが、30年代出生では10ポイント近く長女の方で経験ありの者の割合が高くなっている。

表6 長女／次三女別にみた本人父母への介護経験

(%)

		介護・看護にかかわった			かかわら なかった	総数
		中心となって 介護・看護に あたった	中心ではな いがかかわ った			
本人の父						
全体	長女	84.9	13.2	71.7	15.1	106***
	次三女	81.9	15.3	66.7	18.1	72
	一人っ子	73.9	47.8	26.1	26.1	23
20年代出生	長女	81.8	11.4	71.7	18.2	44**
	次三女	75.0	25.0	66.7	25.0	16
	一人っ子	87.5	56.3	26.1	12.5	16
30年代出生	長女	87.1*	14.5	72.6	12.9	62*
	次三女	83.9	12.5	71.4	16.1	56
	一人っ子	42.9	28.6	14.3	57.1	7
本人の母						
全体	長女	87.6	27.6	60.0	12.4	105***
	次三女	86.3	12.3	74.0	13.7	73
	一人っ子	85.2	74.1	11.1	14.8	27
20年代出生	長女	86.0	23.3	62.8	14.0	43***
	次三女	81.0	14.3	66.7	19.0	21
	一人っ子	84.2	73.7	10.5	15.8	19
30年代出生	長女	88.7	30.6	58.1	11.3	62
	次三女	88.5	11.5	76.9	11.5	52**
	一人っ子	87.5	75.0	21.5	12.5	8
本人の父／母						
全体	長女	88.7	△	△	11.3	150
	次三女	88.5			11.5	96
	一人っ子	85.3			14.7	34
20年代出生	長女	88.1			11.9	59
	次三女	80.0			20.0	25
	一人っ子	91.3			8.7	23
30年代出生	長女	89.0			11.0	91
	次三女	91.5			8.5	71
	一人っ子	72.7			27.3	11

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

数値列左端の記号は「介護・看護にかかわった」「かかわらなかった」間の χ^2 検定の結果。

つぎに介護・看病の費用負担経験の有無についてみる。父親については、負担経験ありとする者の割合は一人っ子で4割強と割合が高く、長女、次三女では1割強で差はほとんどない(p<0.01)。コーホート別にみると、20年代出生コーホートでは次三女の方が30ポイ

ント近く経験ありの者の割合が高いが、30年代出生では差が小さく、むしろ若干長女で高い。

母親については、やはり一人っ子で経験ありの者が4割強と高割合を占め、長女、次三女はともに1割台で差異が小さい($p<0.01$)。しかし、長女・次三女の数値はコーホート間で逆の傾向を示している。すなわち、経験ありの者の割合が20年代出生では16ポイント長女より次三女で高いが、30年代出生では逆に10ポイントほど長女で高くなっており、この差が相殺された結果が全体の数値に反映しているといえる。

父親について实际的介護・費用負担の両方を経験した者の割合を表8でみると、一人っ子で4割強と割合が高く、長女・次三女で1割程度となっている($p<0.05$)。コーホート別に比較すると、両方の経験がある者の割合が20年代出生では長女より次三女で20ポイント以上高いが、逆に30年代では10ポイントほど長女で高い。

表7 長女/次三女別にみた本人父母への实际的介護・費用負担経験 (%)

		实际的介護 あり	費用負担 あり	総数
本人の父				
全体	長女	77.8	12.2**	90
	次三女	83.1	13.6	59
	一人っ子	94.1	41.2	17
20年代出生	長女	75.0△	5.6*	36
	次三女	75.0	33.3	12
	一人っ子	92.9	28.6	14
30年代出生	長女	79.6	16.7***	54
	次三女	85.1	8.5	47
	一人っ子	100.0	100.0	3
本人の母				
全体	長女	85.9△	16.3**	92
	次三女	81.0	14.3	63
	一人っ子	100.0	43.5	23
20年代出生	長女	83.8	13.5**	37
	次三女	88.2	29.4	17
	一人っ子	100.0	56.3	16
30年代出生	長女	87.3	18.2	55
	次三女	78.3	8.7	46
	一人っ子	100.0	14.3	7

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

記号は「経験あり」「なし」間の χ^2 検定の結果。

母親についても、一人っ子で4割強と割合が高く、長女、次三女では1割強である(p<0.05)。コーホート別にみると、両方経験ありの者の割合が20年代出生では20ポイント近く長女より次三女で高いが、30年代出生では10ポイントほど長女で高い。

表8 長女/次三女別にみた本人父母への介護内容 (%)

		実際の介護・費用負担両方	実際の介護のみ	費用負担のみ	話し相手・見舞いのみ	総数
本人の父						
全体	長女	11.1	66.7	1.1	21.1	90*
	次三女	10.2	72.9	3.4	13.5	59
	一人っ子	41.2	52.9	-	5.9	17
20年代出生	長女	2.8	72.2	1.1	21.1	36
	次三女	25.0	50.0	3.4	13.5	12
	一人っ子	28.6	64.3	-	5.9	14
30年代出生	長女	16.7	63.0	-	20.4	54***
	次三女	6.4	78.7	2.1	12.8	47
	一人っ子	100.0	-	-	-	3
本人の母						
全体	長女	14.1	71.7	2.2	12.0	92*
	次三女	12.7	68.3	1.6	17.4	63
	一人っ子	43.5	56.5	-	-	23
20年代出生	長女	10.8	73.0	2.7	13.5	37*
	次三女	29.7	58.8	-	11.8	17
	一人っ子	56.3	43.8	-	-	16
30年代出生	長女	16.4	70.9	1.8	10.9	55
	次三女	6.5	71.7	2.2	19.6	46
	一人っ子	14.3	85.7	-	-	7

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

女性の介護経験の実際の介護行為、介護・看病の費用負担についていえば、年長コーホートでは長女より次三女で経験者割合が高いのに対し、若年コーホートでは逆に次三女より長女の方で高くなっている。なぜ、こうであるかの明確な説明はきないが、おそらく幾つかの要因が介在した結果ではないだろうか。全体として、コーホート間で出生順位とよる介護経験関係の方向がまちまちであって、明確な知見が見いだせない。

(d)本人および配偶者への親の介護・看病経験

表9から本人および配偶者の親への介護・看護経験をみると、「本人・配偶者の親双方」について経験した者の割合は長女、次三男で4割前後、一人っ子で1割強である。「本人の親のみ」とする者は一人っ子で4割強と、長女、次三女の2割台に比べて割合が高い。また、一人っ子では双方ともかかわらなかったとする者の割合も3割と、長女、次三女の1

割合に比べて高くなっている($p<0.01$)。

長女・次三女間をコーホート別に比較すると、「本人の親のみ」とする者の割合が20年代出生の長女で次三女より10ポイント以上高く、30年代出生では次三女で10ポイント高い。また、「配偶者の親のみ」とする者の割合は、20年代出生コーホートの次三女で20ポイント近く高く、30年代出生では長男で10ポイント以上高い。

ちなみに、配偶者の親について介護・看病経験がある者は長女で69%、次三女で63%なのに対し、一人っ子では34%割合が低くなっている。20年代出生コーホートでは経験ありの者が次三女で68%と、長女の56%に比べて割合が高いのに対し、30年代出生では逆に長女で75%と、次三女の61%に比べて高割合となっている。また、一人っ子については20年代出生で42%なのに対し、30年代出生では24%である。

表9 長女/次三女別にみた本人/配偶者父母への介護経験 (%)

		本人・配偶者の親双方	本人の親のみ	配偶者の親のみ	かかわらなかった	総数
全体	長女	40.6	25.2	19.8	14.4	202**
	次三女	36.7	23.2	16.8	18.3	131
	一人っ子	13.5	42.3	13.5	30.7	52
20年代出生	長女	40.6	34.8	7.2	17.4	69△
	次三女	34.3	22.9	25.7	17.1	35
	一人っ子	21.9	43.8	9.4	25.0	32
30年代出生	長女	40.6	20.3	26.3	40.6	133**
	次三女	37.5	30.2	13.5	37.5	96
	一人っ子	-	40.0	20.0	40.0	20

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

配偶者の親の介護については長女・次三女の差異は認められない。いうまでもなく、女性の場合、配偶者の親の介護経験は本人の出生順位よりも配偶者の出生順位に依存すると予想される。しかし、それについてのデータは得られていないので、これ以上の分析はできない。

(e) 男性きょうだいの有無と介護経験

以上の分析に関するかぎり、自分の親への介護・看病経験と出生順位との関係について、女性では男性におけるほどその傾向を明確に把握できない。女性に対しては、自分の親の介護についての規範的期待が必ずしも明確でなく、家族、居住、経済、職業といったさまざまな状況的要因がより強く介入していると考えられる。ここでは、定位家族上での位置・状況に関連して男きょうだいの有無という条件を出生順位に付加して介護・看病経験との関連をさらにみしてみる。

介護・看病経験の有無 父親について介護・看護経験ありの者の割合は、長女・男きようだいあり、長女・男きようだいなし、次三女・男きようだいありで8割台、次三女・男きようだいなし、一人っ子で7割強である(表10)。次三女では男きようだいありの者の方がなしの者より10ポイント程度割合が高い。母親について、および父母あわせた経験については男きようだいの有無による差異は認められない。

表10 男きようだいの有無別にみた本人父母への介護経験[女性] (%)

	介護・看病にかかわった		かかわらなかった	総数	
	中心となって介護・看護にあたった	中心ではないがかかわった			
本人の父					
長女・あり	84.1	10.2	73.9	15.9	88
長女・なし	88.2	29.4	58.8	11.8	17
次三女・あり	84.2	14.0	70.2	15.8	57
次三女・なし	73.3	20.0	53.3	26.7	15
一人っ子	73.9	47.8	26.1	26.1	23
本人の母					
長女・あり	87.0	20.7	66.3	13.0	92***
長女・なし	91.7	83.3	8.3	8.3	12
次三女・あり	85.5	9.1	76.4	14.5	55
次三女・なし	88.9	22.2	66.7	11.1	18
一人っ子	85.2	74.1	11.1	14.8	27
夫/母					
長女・あり	88.3	△		11.7	128
長女・なし	90.5			9.5	21
次三女・あり	89.0			11.0	73
次三女・なし	87.0			13.0	23
一人っ子	85.3			14.7	34

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

介護・看病の程度 父親については、「中心となって介護・看病にあたった」とする者の割合が、一人っ子で5割弱、長女・男きようだいなしで3割、次三女・男きようだいなしで2割、長女・男きようだいありで1割台、次三女・男きようだいありで1割台となっている(表10)。母についても、長女・なしで8割台、一人っ子で7割台、次三女・なしで2割強、長女・ありで2割、次三女ありで1割弱であり、父親と類似した傾向が認められる(P<0.001)。

介護・看病の内容 父親への実際的介護行為の有無については、次三女・なしで10割、一人っ子で9割台、長女・なしで8割台、長女・ありで8割弱、次三女・ありで7割台と

なっている(表11)。母親については、一人っ子、長女・なしでともに10割、次三女・なしで9割弱、長女・ありで8割強、次三女・ありで8割弱である。

父親への介護・看病の費用負担の有無については、一人っ子で4割台、長女・なしで2割台、次三女・なしで2割弱、次三女・ありで1割強、長女・ありで1割である。母親については、長女・なしで5割台、一人っ子で4割台、次三女・なしで3割台、長女・ありで1割強、次三女・なしで1割弱と、父親の場合と比べて差異が顕著である($p<0.001$)。

表 11 男きょうだいの有無別にみた本人父母への実際的介護

		費用負担経験[女性]		(%)
		実際的介護あり	費用負担あり	計
本人の父				
長女・あり		75.5	9.5	74
長女・なし		86.7	26.7	15
次三女・あり		79.2	12.5	48
次三女・なし		100.0	18.2	11
一人っ子		94.1	44.2	17
本人の母				
長女・あり		83.8	11.3***	80
長女・なし		100.0	54.5	11
次三女・あり		78.7	6.4	47
次三女・なし		87.5	37.5	16
一人っ子		100.0	43.5	23

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

記号は「経験あり」「なし」間の χ^2 検定の結果。

さらに、父親について介護・費用負担両方の経験ありとする者の割合は、一人っ子で4割強、長女・なし、次三女・なしで2割程度、長女・あり次三女・あり1割程度である(表12)。話し相手・見舞いのみとする者は長女・ありで2割台、次三女・ありで1割台、長女・なし、一人っ子、次三女なしで1割以下である(0.1>P>0.05)。母親については両方の経験ありとする者の割合は、長女・なしで5割台、一人っ子で4割台、次三女・なしで3割台、長女・あり、長女・ありで1割以下である($p<0.001$)。

以上のことから、長女・次三女にかかわらず男きょうだいのいない者で、介護・看病へのかかわりの程度が強く、実際的介護・経済負担とも経験者割合が高いことがわかった。また、一人っ子では介護・看病経験なしの割合も高いが、男きょうだいのいる長女、次三女に比べて中心にかかわっているものの者の割合も高く、実際的介護・経済負担とも経験者割合が高い。

表 12 男きょうだいの有無別にみた本人父母への介護内容[女性] (%)

	实际的介護・費用負担両方	实际的介護のみ	費用負担のみ	話し相手・見舞いのみ	計
本人の父					
長女・あり	9.5	66.2	-	24.3	74△
長女・なし	20.0	66.6	6.7	6.7	15
次三女・あり	8.3	70.8	4.2	16.7	48
次三女・なし	18.2	81.8	-	-	11
一人っ子	44.2	52.9	-	5.9	17
本人の母					
長女・あり	8.8	75.0	2.5	13.7	80***
長女・なし	54.5	45.5	-	-	11
次三女・あり	4.3	74.5	2.1	19.1	47
次三女・なし	37.5	50.0	-	12.5	16
一人っ子	43.5	56.5	-	-	23

注：△：0.1>p>0.05 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001

数値列左端の記号は「介護・看護にかかわった」「かかわらなかった」間の χ^2 検定の結果。

女性においては、男性ほど出生順位と介護経験との間に顕著な傾向が見いだせなかった。これは、女性の介護経験が本人の家族的状況よりもむしろ配偶者の家族的状況と強く関連しているためと思われる。

4. 結論

今回の分析から得られた知見を以下に挙げる。

- ①長男や一人っ子の方が次三男より、介護・看病へのかかわりの程度が大きい。
- ②实际的介護行為については、長男や一人っ子の方が次三男より、経験者割合が高い。
- ③介護・看病の費用負担については、長男の経験者割合が一人っ子、次三男に比べて顕著に高い。
- ④实际的介護・費用負担の両方を経験した者の割合は、一人っ子、長男の方が次三男に比べて高い。
- ⑤長男では費用負担のみの者の、次三男では实际的介護のみの者や話し相手、見舞いのみ者の割合が相対的に高い。
- ⑥男性では、全体として若いコーホートで出生順位差が縮小している。
- ⑦女性では、介護経験と出生順位との間に男性におけるほど顕著な傾向を見いだせない。
- ⑧女性の一人っ子では介護・看病経験なしの割合も高いが、長女、次三女に比べれば中心的にかかわっている者の者の割合も高く、实际的介護・費用負担とも経験者割合が

高い。

- ⑨女性では、長女・次三女を問わず、男きょうだいのない者に中心的にかかわっている者の割合が高く、实际的介護・費用負担とも経験者割合が高い。
- ⑩女性の一人っ子では介護・看病経験なしの者の割合も高いが、男きょうだいのいる長女、次三女に比べれば中心的にかかわっている者の割合も高く、实际的介護・費用負担とも経験者割合が高い。
- ⑪女性においては、出生順位と介護経験の関係の方向がコーホート間で逆転している変数がみられ、一貫した知見が見いだせない。

また、以下得られた知見が仮説を指示するものであったか否かを検討する。

仮説1：男性では、本人の親への介護経験の程度は、長男の方が次三男よりも大きい。

これについては、おおむね仮説が支持された。

仮説2：男性では、本人の親への介護経験者の割合は、实际的介護行為・費用負担の両面において長男の方が次三男よりも高い。

仮説が支持されたが、とりわけ介護・看護費用については、長男が負担する傾向が強いことがわかった。

仮説3：女性では、本人の親への介護経験の程度は、男きょうだいのいない長女で大きい。

男きょうだいのいない女性では、おおむね介護経験の量が大きいことがわかったが、長女・次三女間の差異は確認できなかった。

仮説4：女性では、本人の親への介護経験者の割合は、实际的介護行為・費用負担の両面において男きょうだいのいない長女で高い。

男きょうだいのいない女性では、实际的介護行為・費用負担の両面において男きょうだいのいる者より経験者割合が高いことがわかったが、長女・次三女間の差異は確認できなかった。

仮説5：男女とも若年のコーホートでは年長コーホートに比べて出生順位による介護経験の差異が縮小している。

男性については、おおむね仮説が支持されたが、女性については必ずしも傾向が見いだせなかった。

冒頭に述べたように、介護経験の形成には規範、資源、状況が複合的に関連している。今回の分析では、介護に対する文化的期待を条件づけるものとして出生順位という定家族上の地位の限定された局面とりあげて分析したが、介護経験と出生順位との間に重要な変数が介在している可能性がある。本人のライフサイクルや家族サイクル上のどの時点で介護が必要となったか、実際にどのような人的資源が活用できたのか、他親族に課せら

れた介護期待や介護経験はどのようなであったか等々が、複雑に交絡して介護経験に影響していると考えられる。さらなる分析においては、こうした説明変数間の交絡の様態を解明らかにするとともに、関連を規定する重要な条件変数として性別・コーホートのみでなく地域特性、階層といったものを射程に入れる必要があるだろう。

(2001年8月提出)

文部省科学研究費基盤研究（A）：10301010

家族生活についての全国調査（NFR98）報告書 No. 2-6

現代家族におけるサポート関係と高齢者介護

Support Resources and Care for the Aged of the Contemporary Family

石原邦雄・大久保孝治 編

2001年9月

日本家族社会学会
全国家族調査（NFR）研究会